⑫ ねぎの根っこのねぎねっこ」

文　山庭さくら
絵　志村　弘昭

(1)

おじさん「あまーく　あまーく　なあれ。」

ネギ畑で、おじさんがネギに水をやっています。

おじさん「お前たちは、すきやきや、なべや、みそしるに入れてもらえるんだよ。あまくて栄養満点のネギは、子どもたちも大好き。」

シャーっ、　シャーっ、

ホースから出る水が、空に虹を作ります。

おじさんは、それを見てにっこり。

おじさん「これでよし。きっとあまいネギができるぞ。」

①

(2)

ネギの根っこの、ネギねっこも、その声を土の中で聞いていました。

ネギねっこ「そっか、甘くなったら、子どもたちが喜ぶんだな。よおし、頑張るぞ！」

ネギねっこは、しっかりと根を伸ばしました。

②

(3)

畑から抜かれたネギたちは、トラックに積まれました。

ネギ１「ねえねえ、これからぼくたち、どこに行くんだろうね。」

着いたところは、スーパーマーケットでした。

ネギ２「どんな人たちと出会うのかなあ。」

ネギ３「ドキドキするねえ。」

５歳くらいの元気そうな男の子と、優しそうなお母さんがやってきました。

男の子「お母さん、今日はすきやきだよね？　ネギも入れなきゃね。」

お母さん「そうね、サトシはすき焼きの甘いおネギ、大好きだものね。」

ネギねっこは、ドキッとしました。

（ネギねっこ）――もしかしたら、ぼく、この子のうちに行くのかな。――

③

(4)

お母さん「サトシもネギ、切ってみる？」

男の子「うん！　切ってみる。」

お母さん「ネギの根っこを右にして、まな板の上に乗せたら、

左の手はネコの手。前におままごとで、練習したでしょう？　そうしたら、根っこはいらないから、こんなふうに切って捨てちゃうの。」

お母さんはそう言いながら、ネギを一本切ってみせました。

④

(5)

ねぎねっこは、仲間が捨てられたのを見てびっくりしました。

(ネギねっこ)――おじさんが、甘かったら、美味しく食べてもらえるって言ってたのに、ぼく、捨てられちゃうの？　そんなのいやだよ！――

男の子が、ねぎねっこを切り落としたとたん、ねぎねっこはまな板の上から、ピョンと飛び降りました。

そうして、とっとこ、とっとこ、逃げ出しました。

⑤

(6)

ドアのすき間から逃げ出したねぎねっこは、逃げながら
大きな声で叫びます。

ネギ根っこ「大変だ、大変だ。ぼくたち根っこは捨てられる！」
チューリップ「えーっ、捨てられるですって！　それは大変！」
庭のチューリップは、それを聞いてびっくり。
チューリップ「ミミズさん、ごめんなさい。もっとおしゃべりして
いたいけど、私も逃げなきゃ。」

チューリップの根っこは、ねぎ根っこのあとを追って
逃げ出しました。
もちろん、茎も葉っぱも花も一緒です。

⑥

(7)

ネギ根っこ「大変だ、大変だ、ぼくたち根っこは捨てられる！」

ナス「えーっ、それは大変！」

ナスの根っこも逃げ出します。

とっとこ、とっとこ。

ネギ根っこ「大変だ、大変だ、ぼくたち根っこは捨てられる！」

トマト「えーっ、それは大変！」

トマトの根っこも逃げ出します。

とっとこ、とっとこ。

ネギ根っこ「大変だ、大変だ、ぼくたち根っこは捨てられる！」

キューリ「えーっ、それは大変！」

キューリの根っこも逃げ出します。

とっとこ、とっとこ。

ネギ根っこ「大変だ、大変だ、ぼくたち根っこは捨てられる！」

草「えーっ、それは大変！」

道ばたの草の根っこも逃げ出します。

とっとこ、とっとこ。

みんなが逃げているのを見た桜の木の根っこも、びっくりして逃げ出しました。

ドッスン、ドッスン。

とっとこ、とっとこ、とっとこ、ドッスン、ドッスン。

とっとこ、ドッスン、ドッスン。

行列が続きます。

桜の木「ねえねえ、ぼくたち、どこに行ってるの？」

桜の木は、前を走っている草に聞きました。

草「そういえば、どこに行ってるんだろう？　ねえねえ、ぼくたちどこに行ってるの？」

草は、前を走っているキューリに聞きました。

キューリはトマトに、トマトはナスに、ナスはチューリップに聞きました。

チューリップ「ねえ、ネギ根っこさん。私たちどこに行ってるの？」

ネギ根っこ「ネギ畑のおじさんのところさ。」

⑧

(9)

その頃、おじさんは、ネギ畑でいつものように、

「あまーくなあれ」と言いながら、ネギに水をやっていました。

とっとこ、とっとこ、ドッスン。

おじさん「うわぁ、なんだ！」

ネギねっこを先頭に、たくさんの根っこたちが、茎や幹や葉っぱや花を乗せたまま、やって来るではありませんか。

おじさんは、腰をぬかさんばかりに驚きました。

生まれ故郷の、ネギ畑に着いたネギ根っこは、おじさんに
聞きました。

ネギ根っこ「おじさん、おじさんは、ぼくが畑にいるときに、
すき焼きやお鍋に入れてもらえるから、あまーく
なあれって、言ってくれたよね？」

おじさん「そうだよ。」

ネギ根っこ「でも、ぼく、捨てられちゃったんだよ。捨てられちゃ
うんなら、ぼくなんて要らないよね？」

ねぎ根っこは、涙ぐみながら言いました。

おじさん「そっか、大事なことを言うのを忘れていたね。君たち
根っこは、たくさんの栄養を吸い上げて、茎や葉っぱや
実を、元気にする役目があるんだよ。」

桜の木の幹「君たち根っこがなかったら、ぼくたち、まっすぐ立つ
ことなんてできないよ。」

トマト「そうだよ。君たちがいてくれるから、ぼくたち、お水や
栄養をとることができるんだよ。君たちは縁の下の力持ちさ。」

木の幹や草の茎やトマトの実たちも、口々に言いました。

⑩

⑾

ネギ根っこを追いかけてきて、やっと追いついたお母さんも息を切らしながら言いました。

お母さん「ごめんなさいね。大事な役割をもっているのに、ありがとうも言わずに、捨てちゃって。」

男の子「根っこは、とっても大事なんだね、お母さん。」

幹や葉っぱ「そうだとも、根っこくんたちがいなかったら、僕たちは生きていけないんだよ。」

根っこにくっついている、茎や幹や葉っぱたちが、口々に言いました。

根っこたち「そっか、ぼくたち、とっても大事な役目をもってるんだね。知らなかったよ。さあ、みんな帰ろうか。」

根っこたちは安心して、幹や茎や花たちと帰って行きました。

おじさん「おかあさん、ネギの根っこは、土に植えたらまた生えてきますよ。」

帰りぎわにおじさんが、お母さんに言いました。

お母さん「まあ、知らなかったわ。帰ったら、土に埋めてみましょう」

お母さんと男の子に連れられて、おうちまで帰った

ねぎねっこはというと……。

お母さん「さあ、また土の中で頑張ってね。」

男の子「根っこくん、ぼく、甘いネギが大好きだから、美味しい

ネギをまた作ってね。」

そうして、ネギねっこはまた、土に埋められました。

ねぎねっこは、しっかり土の中に根を張りました。

さあ、またおいしいネギを作るぞ！